

# 被爆地広島・長崎と『靖国神社遺児参拝文集』

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝 (12)

松岡 勲

はじめに

今年の(二〇一八年)四月一九日〜二二日、広島・長崎に一九五〇年代の『靖国神社遺児参拝文集』(以下、『靖国文集』)の調査に行きました。広島では広島市公文書館と広島市立中央図書館、長崎では長崎県立図書館に『靖国文集』が収蔵されています。

私の関心事は、『靖国文集』に原爆投下時の体験やその戦後の生活への影響がどう書きこまれているかということでした。

広島県の『靖国文集』は次の二冊が残っています。(前者は広島市公文書館、後者は広島市立中央図書館に所蔵)これ以降も発行されたかどうかは不明です。

『第一集』(一九五四年三月二五日刊、広島県遺族会発行、中学校二年生、七百十名)

『第二集』(一九五五年三月二〇日刊、同会発行、中学校二年生、七百三十六名)

長崎県の靖国文集は六冊残っています。(すべて長崎県立図書館所蔵)第六集が最後と思われます。

『第一集』(一九五五年三月実施、長崎県民生労働部生活課発行、小学校6年生、二九〇人)

『第二集』(一九五六年三月実施、同課発行、小学校六年生六四七人)

『第三集』(一九五六年九月実施、同課発行、小学校六年生及び中学三年生、六〇〇人)

『第四集』(一九五七年一月実施、同課発行、中学三年生及び小学校六年生、五六四人)

『第五集』(一九五九年五月二〇日刊、同課発行、中学校三年生、五五一人)

『第六集』(一九六〇年五月三〇日刊、同課発行、中学校三年生、五六三人)

長崎から遙か東京へ

以前に引用した(連載八回「反天皇制市民一七〇〇」三八／三九号)今井美佐子著『五島福江新栄町 家族のスケッチ』(ドン・ボスコ社)で遺児集団参拝の際の当時の長崎県五島の子どもの様子が描かれていました。それを引用します。

隣家の六年生の好子さんが学校代表で靖国神社へお参り

に行くことになった。

男では同じ町内の平岡のせいちゃんが行くという。

靖国神社は東京だというので、新栄町の子どもたちは大騒ぎをした。

「おりゃあ、五島しか知らんとに、好子さんにや、海ば渡って、長崎よりも福岡よりも遠か東京へ行くところよ」

「東京には美空ひばりが住んどつとぞ」

「天皇陛下も住んどつとぞ」

「見たこともなか高か建物があつて、見たこともなか電車や汽車が走りよつとぞ」

「おなごん人ども化粧ばして、きれいか洋服ば着て町ば歩きよつとぞ」

様々なことばが飛びかつたあと、皆が嘆息をつかんばかりにして、「ああ、好子さんやせいちゃんが羨ましかあ」といった。

一九五〇年代の日本は現在のように交通機関は発達していませんし、勿論新幹線ありません。長崎から鉄道を利用して東京まで行くのは夜行列車（生徒たちの乗る列車を「靖国号」と呼びました。）を使って、丸六日間かかりました。（車中二泊です。その途中には京都の観光が入っていました。）長崎県は島の多い県



です。各地から船に乗り、佐世保市や長崎市に着き、そこで一泊し、さらに長崎駅で合流し、東京へ向かいました。当時放送を開始したテレビも東京の旅館ではじめて見る経験をしました。以前に『家族のスケッチ』の著者の今井美佐子さん（高校卒業後、五島市福江町から大阪市に出て来ておられました。）と連絡をとることができ、当時の遺児参拝の体験者に連絡を取れないか尋ねました。今井さんは遺児参拝の経験者ではありませんが、福江の兄弟や知り合いに問い合わせてくださいましたが、「靖国参拝を体験した同年代の人たちは長崎市や関西方面に出ている機会が取れない。」とのことでした。その時、『靖国文集』を調査する機会があったら、五島の子どもの作文をぜひ読みたいと思いました。まず最初に五島の子どもの作文を見てみます。

● 「去る十一月十一日の朝八時に福江を出発しました。福江市から十七名の遺児として、福祉事務所の、祝さんからつれられて、長崎港にみんな無事に到着することができました。十二日朝は九時に旅館を出て、駅前九時半にみんなが集まって、知事さんの話があり、それがすんですぐ汽車に乗った。汽車の旅が一番つまらなかった。富士山を見ることが出来ました。東京へ着いたのが十三日の午後七時でした。」十四日の朝から見学でした。観光バスに乗って、一番最初に靖国へいきました。(略) 私はその時に感じた。戦争がなかったらこんな大勢のお父さん、おじさん方がなくなることはないと感じました。」十六日の朝出発した、汽車は京都に着き、京都で三時間見学して、すぐ汽車に乗って、長崎に帰りました。」十八日の朝長崎を出発して、三時に福江港に着くことができました。」

〔第四集〕福江市、高部チカエ)

● 「それから東京のいろいろな所を見学し、夜汽車に乗り汽車の中で二晩を過ごし、汽車に乗って一日目の正午、長崎駅についた。駅につくとむかえの人が多く祭りのようであった。私は一週間もの旅行、東京までの旅行と言うものは、もうできないかもわからない。たぶんできないだろう。また、一週間の旅行、たのしかった旅行、これは、私の一生の思い出になる事だろうと思う。」

〔第四集〕福江市、真島須磨子)

● 「私は幼い子供の時は父がいなくても淋しいとも何とも思わなかったが、今では父がいてくれたらなアーといつも悲しんでおります。私は父をもっている人を見るとあの人はいいなアー、私に

も父がいてくれたらといつも心で思っています。でも口に出すことは出来ない。父は国のために死んでいったのだと私は自分の心を自分でなぐさめています。(略) 父ちゃんに会って一度でもいから『父ちゃん』と呼んで見たい。」「昨日まで良い天気だったのに今日はどうしたことか天気が悪く汽船は欠航するのじゃないかと不安になりながら準備をしていた。(略) 私はふつとこんなことをおもいついた。昨日まであんなによい天気だったのに今日はどうしたことかひどく荒れたので不思議でたまらなかった。あわかった。父が死ぬ時ひどい目に会ったので父と会う日はこんなに荒れたんだ、父は私たちにさとらせるためにと思った。」

〔第四集〕福江市、轟正子)

これらの文章を読むと「靖国で父と対面」というのは遺児参拝の建前で、ほんとうの子どもの気持ちは、「東京つてどんなところ?」「着くまでの車窓の景色は?」とか旅の期待と不安が大きかったのではないかと思います。また父との対面の建前よりも「親のいない哀しさ」や「母や祖父母との戦後の生活の苦しさ」など心の底からこみ上げてくる思いがあったのではないのでしょうか。

### わずかに描かれた被爆の様子 (長崎)

次に『靖国文集』には被爆地長崎の実態や様子がどう書かれているかです。『第一集』～『第六集』の六冊をコピーしましたが、著作権の関係で最大で本の半分しかコピーできませんので、全部を読んだ訳ではありませんが、あまり「原爆」や「被爆」の話は

出てきませんでした。原爆の被害を子どもたちは目撃しているはずですし、子ども自身や家族が原爆の被害にあっていると思いませんが、私が読んだ範囲では数少なかつたです。しかし、長崎（五島）の子どもの文章で「おとうさんは目を広島の子供ばくだんでやられた。」と書いているのは驚きです。以下被爆についての記述です。（四つ目の文章は空襲か原爆投下か不明です。）

● 「誰か一人として忘れ得ようか。昭和二十年八月九日原子爆弾投下の日を。一瞬にして人類の平和を乱し人々のあまりにもみじめな姿を。住まいし泉は（ママ）焼かれ父を失い後に残った僕達。母と子に残されたものは一体何が有ったのでしょうか。唯汗と涙の十三年。」

『第四集』五島・有川町、斎藤五十三

● 「ぼくは二十年八月三十一日に生まれた。その時戦争はもう終わっていたそうです。僕のおとうさんは目を広島の子供ばくだんでやられたそうです。その時はもう戦争が終わってたべものがないで非常に不便だったとお母さんからきました。そしてぼくを今までそだててくるのにも大変苦労したよ、とおしえてくれました。」

『第四集』上五島町、川田康和

● 「父は軍人で戦争の時長崎で造船所で働いていた。そして終戦ま近かの原爆のために死んでいったのだ。」

『第五集』長崎市・土井首中、平幸教

● 「お父さんが戦地に立たれる時は、小さな赤んぼうでした。戦争中は、母の背におわれて逃げまわり、また田舎に疎開し、悲しいめにあいました。」

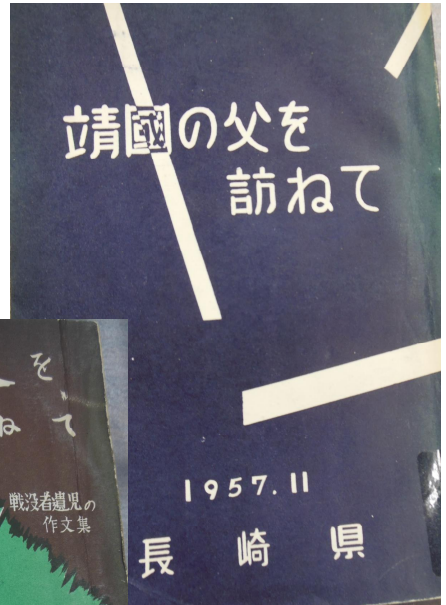
『第五集』長崎市・海星中、吉田肇

なぜ長崎県では被爆についての記述が少ないかいくつか考えられます。『靖国文集』（長崎）では、子どもの作文のタイトルが「靖国の父を訪ねて」「靖国神社参拝」等決まったものでした。この制約は子どもたちに自由な発想で作文を書くことを抑圧します。

また『靖国文集』（長崎）は長崎県民政労働部生活課の発行です。この課は戦没者の援護関係の部署です。参拝行事の引率者も長崎県は県職員、地方自治体職員です。行政主導ということでしょうか。このような『靖国文集』（長崎）の性格が原爆被害の記述を少なくさせたのかも知れません。

「国の危機に際して、一身をなげすてて、国を守ることは、国民の義務であります。みなさんのお父さんは、立派にこのつとめ、義務を果たされたのであります。」

『第一集』壮行式での西岡竹次郎長崎県知事の挨拶



### 戦死した父の記憶・家族の戦後（広島）

続いて『靖国文集』（広島）を読んでききます。広島の場合、文集の発行者は広島県遺族会で、作文のタイトルは自由です。「遺児参拝」の枠組みは長崎の場合と同じなのですが、これらのことが感想文に多様さを持たせたと思われれます。（感想文のタイトル

を最初に付けておきます。）なお『第一集』は文書の劣化が激しく、複写は許されず、写真撮影のみでした。

● 「母も失って／始めて行く東京、靖国神社、どんな所だろう。お父さんさえ生きていて下されば・・お母さんだけでも生きていて下さればと考えた。・・可愛いそうな自分、妹・・いやこんな事を考えてはいけない、もっと強くいきなればと考えた。」

『第一集』（芦品郡・山内北中学、福本恒夫）

● 「シレットの父／私の父が戦死したのは、終戦の六月であるが、その間で、父と生活したのは、私が数え年五つの時、わずか半年ほど一緒にいただけである。私は父の顔をよくおぼえていない。唯やさしい立派な父であった、と云う事をおぼろげながら記憶している。（略）終戦になって、お友達のお父さんほとんど帰ってこられるのに、私の父はお帰りにならない。「なぜ恵子のお父ちゃんは帰ってこないの・・隣の○○ちゃんの所も、××ちゃんの所も帰ってきちゃったのに。」と毎日毎日母をこまらせたものだった。そんな時、一番困る母の顔は、いつも今にも涙が出そうな顔だった。毎日駅頭に出て、父の姿を母と二人で探しもめたものだった。」

『第二集』（広島市、広島女子商、小野恵子）

● 「父に会う喜び／私の父は、私が生まれてすぐに出征されました。私は、自分の父の顔もしらずに、ただ写真を見ただけです。私の父が戦死されたのは、二十年四月二十四日です。遺骨が帰った時、田舎の祖母さんが「奉ちゃん、お父さんがお帰りになりました

したよ。」と言われ、私は遊んでいたのも忘れ、その言葉がうれしさに家にかけてこみました。家にはいったらその喜びは飛びさつたように、悲しさにふるえて小さかった私はその場所で座りこみ、大声をあげて泣きました。母はふるえながらこの私をだきしめて、「なかなかのよ」といわれても私は泣きつづけました。」

『第二集』（広島市・国泰寺中学、木村奉吉）

●「忍耐と努力で／母は父からの電報を受けるなり、生まれて七ヶ月の妹を背負い数え年四才とはいえ、三才にもならない私の手を引いて、あの西練兵場（\*爆心地で原爆の直撃を受けた。）に行つたあの時の事をうすうす思い出させて、あの時「お父ちゃんはね、遠くの戦争に行つてエミ子ちゃんが七つになったら帰るかからね」と私の手をしっかりと握つて「おりこうにして大きく大きくなるんだよ」とお菓子の乏しいあの頃、隊でもらわれたコンペイトウの袋を、私に呉れ、「おおミドリよ、大きくなれよ」とさも虫の知らしたらしく、今思い出して見るのにたいたい子で大きくなれ、だけで待つていてくれの言葉がなかったようでした。丁度七つの年の二月六日父は、白木の箱でエミ子の許へ帰つてこられました。」

『第二集』（呉市、東畑中学、松中エミ子）

●「心と心との対面／あーお父様とは、私がお呼びするだけなのかしら、今日まで、お父様がないと言つて泣きませんでした。又泣く程さみしく思った事ありませんでした。しかし、この時ばかりは、二度とない悲しい寂しさを感じました。これは姿も声もない対面とは百も承知のはずでしたが、何故か、姿のあるお父様

を想像していたからです。それ故、今日の対面が、寂しくてものたりなく残念でした。今までの気持は何処へやら、咽がつまり、目の前が眩む程でした。」

『第二集』（広島市・幟町中学、片山郁子）

●「ああお父さん！！／父は、靖国神社に居ると言われても、居るとは思わない。父は沖繩で戦死しました。私は、どこまでも、父は沖繩の海岸に眠っていると思う。父の沖繩からの最後の手紙を、母に読んでもらった時、日頃泣いたことがない私が、母と一緒に泣いてしまいました。父と別れた九、十年という長い間、女一つの手で不自由もせず、成長した私は幸福だと思う。」

『第二集』（福山市・城南中学、小川知子）

### 被爆地広島、空襲被害の呉の思い

原爆投下の記憶や被爆体験を記述した文章は長崎より多いのですが、そんなに多いとは言えません。原爆被害の体験を子どもたちが書こうとした時、乗り越えなければならぬ障害がいくつもあったのだらうと思います。また一昨年大ヒットした映画「この世界の片隅に」（片淵須直）は軍港である呉の大空襲を描いたもので、記憶に新しいですが、呉空襲の文章も入れました。

●「二度目の参拝／お父さんは二才の時に出征されました。そして三才の時に戦死され、今日まで十余年という月日がたちました。（略）お父さんの顔もはつきりわかりません。何より大切にし

ていたお父さんの写真まで原爆のためにうばわれてしまいました。」

『第一集』（広島市・国泰寺中学、森本恒子）

● 「遺言を胸に／お父様が広島で原爆で戦死なさってから、もう九年たちました。お母さんと僕達三人の子供が、さみしく暮らしていました。お父さんはそれを靖国神社から見ておられるのです」

『第一集』（広島市・観音中学、山崎征一）

● 「原爆のいけにえの父に／おそろしい原爆のために、大きな助けをもとめる悲鳴をあげながら、二度と帰らぬ人となった父、苦しんだと言う姿がすぐ私の目にはつきりと見えたようでした。」

『第一集』（加茂郡・志和堀村、石川正）

● 「原爆の父を訪ねて／私の父は、昭和二十年八月十九日市内基町の第六部隊で戦死しました。弟が五月の終わり頃亡くなった時には、大変元気なお姿を見せて下さったのに、三月とたたない内に、あの小さな白木の箱におさまるお骨の悲しいお姿でお帰りになるとは、誰が想像したことでしょう。八月六日の原子爆くんだんから後、父の身を案じ、ずっと探しつづけ、やっと探しあてたと思つた時には、もう父はこの世の人ではなかったのです。あの小さな白木の箱が母の目に映つた時、一体母の心中がどんなでたでしょう。私はその頃小さくて母の悲しみの万分の一も知ること出来ませんでした。そして父の死もそれほど悲しいものだと思いませんでした。しかし、小学校に入ってから、参観日の時などお友達のお父様がいらっしやてるのをみると、私のお父さんはな

ぜあんなに早く死んでしまったのだろう、と思うことがたびたびでした。しかし、近頃はいくら考えてもなくなってしまうものは仕方がないとあきらめるようになりました。」

『第二集』広島市・清心中学校、川口桂子）

● 「鳩を見つめて／僕達は呉の大きくうしゅうで丸焼けになったのです。その秋啓郡ちゃん骨の病気で死にました。根野に疎開をして苦しい日もありました。今は広島で国泰寺にいます。もう一年余りしたら、高校受験です。しつかりやっけてどうしてもパスします。」「次々話しかけても父からの返事はない。（略）父の戦死は本当に日本のために役立ったのであろうか。役に立たないにしても父は戦争のために死んだのだ。戦争さえなかったら。元氣のよかったスポーツマンだった父はまだまだ丈夫で働いているだろうに。」

『第二集』広島市・国泰寺中学、長本正臣）

● 「戦争の思い出／私は五つの時の頃、戦争当時のことを胸の中に思いめぐらした。昭和二十年六月二十二日朝（\*呉工廠造兵部空襲で工廠に大被害）、私の父は祖母にこんなことをいつて出征した。「お母さん、爆撃されたらすぐに平原の方へ多津子連れで逃げなさいよ」といったのである。これが永久の別れとなろうとは、神以外に誰知ろう。（略）その夜祖母と私は夕食の準備をして、父の帰りを今か今かと待ち受けたが、父はもはや私たちの前には姿を見せなかった。十時過ぎ父が死去したとの伝達が入った。」

『第二集』広島市・東畑中学、宮尾多津子）

『第一集』は編集を葛原しげるに委嘱されました。葛原しげる（一九八六年〜一九六一年）は童謡詩人、童謡作詞家、童話作家、教育者で、代表作として広く知られる作品に「夕日」があります。彼の編集後記「靖国の子を編みて」には、「たまたま、既に『原爆の子』があり、『基地の子』もある現代日本になくはならぬ『靖国の子』が、今にして出る事をよるこぼ。」とあります。これが端的に表現された「靖国神社遺児参拝の枠組み」であると思います。葛原は追記で、「日露役で兄を、大東亜戦役に長男と次男ささげた」と書いています。心中は複雑であっただろうと推測します。

『第二集』の「編集を終えて」では（編集は他の人変わったようです。）、「幼い心に、再軍備論に脅えたり、父のない子が就職に阻まれていることに憤りを感じたりするあたりは、余りにもいたいたしさを覚え、又、大人の一人である编者自身が、強く叱られている如くにも感じさせられた。／私は、この一編が、これからどんな波紋を描いていくだろうかに大きな期待を抱く。これがたとえこの子達の生涯の間でなくてもある。」と書かれています。

この後、一九五五年には第一回原水爆禁止世界大会が開かれます。原子爆禁止運動と遺族会運動とがどのように交錯したのか、一九六〇年代の靖国神社国家護持運動とも関わって興味のあるところでは。私もまた靖国神社遺児参拝の体験者であり、『靖国文集』の子どもたちはビキニの水爆実験や第五福竜丸事件、放射能雨の恐怖とともに体験した同世代です。今回広島・長崎の『靖国文集』にたどり着けたことは幸せでした。





## おわりに

『靖国文集』（長崎・広島）を調べてきましたが、今後調べて見たいことがあります。広島・長崎で戦時中の建物疎開作業や工場動員に参加した学徒（第二次世界大戦末期の一九四三年以降に深刻な労働力不足を補うために、旧制中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食料生産に動員されました。）が原爆投下によりたぐさん亡くなりました。靖国神社遺児参拝と踵を接して、一九五〇年代後半に原爆で亡くなった学徒を準軍属として認定させ、戦傷病者戦没者遺族等援護法の適用（遺族年金の支給）をさせる運動が広島で起こりました。その後一九五八年に援護法が改正され、動員学徒に援護法が適用され、遺族年金が支給されました。さらに援護法が適用された動員学徒たちは靖国神社に合祀されました。（関千枝子著『ヒロシマの少年少女たち／原爆、靖国、朝鮮半島出身者』彩流社）この運動は長崎にも拡大し、占領下の沖縄にも拡張されました。次回は動員学徒への援護法適用、靖国合祀について、広島・長崎について調べて、報告したいと思います。

（二〇一八・六・七）

